

# 失敗観とセルフハンディキャッピングとの関連

## ーフィールドホッケー部員を対象にー

安達 悠子<sup>1</sup>・中山 諒<sup>2</sup>

(1, 2 : 東海学院大学)

### 要 約

フィールドホッケー部員を対象に、部活動時の失敗観とセルフハンディキャッピングについて因子構造を確認することおよび失敗観とセルフハンディキャッピングとの関連を明らかにすることを目的にした。フィールドホッケー部に所属する大学生 83 名に失敗観尺度(池田・三沢, 2012)と日本語版セルフハンディキャッピングスケール(沼崎・小口, 1990)に回答を求めた。その結果、失敗観では先行研究に似た、「失敗の拒否」、「失敗の受け入れ」、「失敗の高頻度」、「自尊感情の低下」の 4 因子が示された。一方、セルフハンディキャッピングでは先行研究とは異なる「後ろ向き」と「前向き」の 2 因子が示され、外部に原因帰属をしたり、努力をしないといった「後ろ向き」な行動をすることと、積極的に切り替えたり、準備をするといった「前向き」な行動をすることは別物であると示された。そして、「後ろ向き」な行動の背後には失敗を拒否し、受け入れない価値観があること示唆され、「前向き」な行動の背後には失敗は自尊感情の低下を招かないと見なす認知体系があることが示唆された。

キーワード : 失敗観, セルフハンディキャッピング, フィールドホッケー

### はじめに

#### フィールドホッケーとは

フィールドホッケーは先端の曲がったスティックと硬球を使い、11人(うち1人はゴールキーパー)ずつの2チームが芝の上で相手ゴールに向けて1つのボールを互いに打ち込もうと競い合うスポーツである。日本におけるフィールドホッケーの登録競技人口は約1万人で、サッカーの96万人やバスケットボールの62万人と比較すると多くはない(笹川スポーツ財団, 2015)。しかし、19世紀半ばにイギリスで現在の競技形式が起こって以降、男子は1908年に、女子は1980年からオリンピックの正式競技になるなど世界中で愛されているスポーツの一つである。近年、日本は特に女子が好調で、2004年にアテネオリンピックに初出場してから2008年の北京オリンピック、2012年のロンドンオリンピック、2016年のリオデジャネイロオリンピックと4大会連続で出場を果たしている。

#### スポーツと精神

フィールドホッケーをはじめとしてスポーツをする際には体力や身体技能を向上するだけでなく、精神を良好に維持することが重要だとされている。精神面に着目す

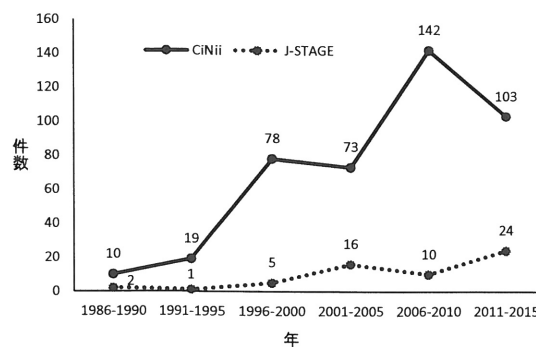


図1 「メンタルトレーニング」を含む研究件数の推移

るこの傾向は近年に顕著で、例えば図1は「メンタルトレーニング」を検索語に文献データベースである CiNii と J-STAGE で論文検索をして発表年毎に研究件数をプロットしたものであるが、1990年代後半から研究件数が増えていることが見てとれる。メンタルトレーニングで対象となる精神特性・状態には、焦りや緊張、不安など様々あるが、競技を継続する過程で多かれ少なかれ起こる失敗をどのように捉えるかはその一つに挙げられるだろう。

## 失敗観

失敗とは「一人もしくは複数の人間がある行為を行うものの、それが当初の目的達成につながらない、あるいは望ましくない結果が生じること」と定義され、失敗に対する捉え方や価値観のことを失敗観と呼ぶことができる(池田・三沢, 2012)。フィールドホッケーにおける失敗には、試合でミスをする、よい成績を残せないなどが想定される。「失敗は成功の母」という言葉があるように失敗は自己の学習や成長の契機になりうる。学習の起こり方の一つとして古典的に挙げられる試行錯誤(試みと不成功を繰り返しながら解決を見出そうとすること)では、失敗を含む不成功は失敗時と成功時における環境の違いを見出し以降の成功を導くために不可欠な要素である。また、発見学習(学習者が自分で知識を探究して発見していく学習スタイル)の重要性も古くから指摘されている。これは主に教室での学習に適用される言葉ではあるが、スポーツにおいても自身の失敗という自己関与の高い事象を学習材料とし、自ら教訓を発見していくことで教室での発見学習と同様に学習内容が長く保持され応用が効く知識として学習されるというメリットが望めると考えられる。このように競技に関する失敗は、それを経験して次に活かすという点ではポジティブな側面を持つ<sup>1)</sup>。その一方で、失敗は恐怖や不安などのネガティブな感情を生起させるストレス( e.g., Sagar & Stoeber, 2009; McGowan, McGowan & Omifade, 1997) やドロップアウトの一因にもなり得る( e.g., 稲地・千駄, 1992)。失敗にはポジティブな面とネガティブな面があるため、池田・三沢(2012)が指摘しているように失敗観は因子構造を持つ概念であると仮定できるであろう。そして、スポーツ競技者が競技での失敗に対してどのような価値観(失敗観)を持っているかは興味深い問題の一つである。

## セルフハンディキャッピング

失敗のネガティブな側面に備えてとられる方略の一つに、セルフハンディキャッピングがある。セルフハンディキャッピングとは「自分の何らかの特性が評価の対象となる可能性があり、かつそこで高い評価を受けられるかどうか確信がもてない場合、遂行を妨害するハンディキャップがあることを他者に主張したり、自らハンディキャップを作りだす行為」と定義される(安藤, 1990)。フィールドホッケーであれば、「アウェーなのでやりにくそうだ」や「最近寝不足だ」といった発言を周りにあらかじめめぐる(主張的セルフハンディキャッピング)

グ)、試合の前にわざと夜更かしをしたり、練習量を控えるといった行為をとること(遂行的セルフハンディキャッピング)がセルフハンディキャッピングになる。セルフハンディキャッピングのメリットは、失敗した時に原因を自己の外部に帰属して自己防衛ができることである( e.g., Feick & Rhodewalt, 1997)。一方でデメリットは、しばしば発話(主張的セルフハンディキャッピング)にとどまらずに実際に行為(遂行的セルフハンディキャッピング)をとることで課題遂行の成功の確率が低下してしまうこと(Leary & Shepperd, 1986)、セルフハンディキャッピングにより自己防衛ができて一時的に情動の改善をもたらされたとしても目前の問題解決が阻害されている限りは長期的には情動の悪化につながるなどが挙げられる。

セルフハンディキャッピングという言葉が提唱された1970年代から80年代前半にかけて行われた初期の研究では、薬物依存者やアルコール依存者、特定の心的症状を持つ人がセルフハンディキャッピングの使用の典型とされた。しかし、Jones & Rhodewalt (1982)により様々な評価の状況での一般的なセルフハンディキャッピング傾向の強さを直接的に評価することを目的とした尺度が提案され(日本語版は、沼崎・小口, 1990)、セルフハンディキャッピングという概念を適用する対象が拡張された。現在では、セルフハンディキャッピングは健康な人にも日常的に選択される方略と見なされている。Jones & Rhodewalt (1982)が作成したセルフハンディキャッピングスケールは質問紙の形式であるが、その基準関連妥当性はセルフハンディキャッピングの実行動を外的基準にして示されている。例えば、大学の水泳選手およびプロゴルファーにセルフハンディキャッピングスケールへ回答を求めてセルフハンディキャッピング方略を採用する傾向の強い人と弱い人を選び、重要な大会の前とそうでない大会の前の練習量を比較した結果、重要な大会の前にはセルフハンディキャッピング傾向の弱い人は練習量を増加させるのに対して、セルフハンディキャッピング傾向の強い人は練習量を増加させなかったことが示されている(Rhodewalt, Saltzman & Wittmer, 1984)。

セルフハンディキャッピングは、主張的ハンディキャッピングと遂行的ハンディキャッピングとに大別して捉えられることが多いが、Arkin & Baumgardner (1985)は主張的か遂行的かに加えて、ハンディキャップの位置が個人の内部にあるか外部にあるかという内的・外的と

いう区分にも言及している。このようにセルフハンディキャッピングにも複数の区分が想定され、スポーツ競技者がスポーツでの失敗に対してどのようなセルフハンディキャッピングを構成因子として有しているかもまた、興味深い問題の一つである。そして、セルフハンディキャッピングが失敗を何かに帰属させるためにとられる行動方略である以上、失敗に対する捉え方や価値観である失敗観の違いによりセルフハンディキャッピング傾向が異なる可能性が考えられる。両者の関連を明らかにすることは、セルフハンディキャッピングが生じる過程を理解する一助となるであろう。

## 目的

フィールドホッケー部員を対象に部活動時の失敗観とセルフハンディキャッピングについて因子構造を確認すること、および失敗観とセルフハンディキャッピングとの関連を明らかにすることを目的とする。

## 方法

### 参加者および調査時期

国内2大学でフィールドホッケー部に所属する大学生男女を対象にした。2大学はともにフィールドホッケー部の活動が盛んな強豪校であった。2015年に国内大学でのフィールドホッケーの大会シーズンであった10月から11月にかけて質問紙調査を行い、83名(男性41名、女性42名、平均年齢20.11歳、 $SD=1.22$ )から回答を得た。

### 質問紙

**失敗観尺度**：失敗に対する捉え方や価値観を測定するために、失敗観尺度(池田・三沢, 2012)を用いた。参加者は、「部活中での失敗についてお答えください。」という教示文を読んだ後に、「失敗とは頻繁に起こることだ」などの24項目に、全くそう思わない(1)、あまりそう思わない(2)、どちらでもない(3)、多少そう思う(4)、非常にそう思う(5)の5件法で回答した。

池田・三沢(2012)は失敗をネガティブな感情を喚起させるものと考える価値観である「ネガティブ感情価」、失敗を学習の機会と考える価値観である「失敗の学習可能性」、失敗を可能な限り避けたいと考える価値観である「失敗の回避欲求」、そして失敗が避けられず不可避に発生しうるものと考える価値観である「失敗の発生可能性」という4因子から構成されるとしている。

**日本語版セルフハンディキャッピングスケール**：セルフハンディキャッピングの個人の傾向を測定するために、日

本語版セルフハンディキャッピングスケール(沼崎・小口, 1990)を用いた。スポーツ場面でのセルフハンディキャッピングに焦点を当てるため、質問項目に含まれた試験を試合にするなど表現の一部を変更して調査に用いた。参加者は、「部活中での考えや行動についてお答えください。」という教示文を読んだ後に、「人より体調が悪いことが多い」などの22項目<sup>2</sup>に、全く当てはまらない(1)、当てはまらない(2)、やや当てはまらない(3)、やや当てはまる(4)、当てはまる(5)、非常によく当てはまる(6)の6件法で回答した。

日本語版セルフハンディキャッピングスケールに関して沼崎・小口(1990)は、所期の目的に向かって行動しようと思っても統制不能なんらかの障害があるためにできないことを表す「やれない」因子と、所期の目的に向かって行動しようとはしない、つまり統制可能であるがあえて障害を統制しようとはしないことを表す「やらない」因子の2因子を見出している。以上の二つの尺度に関して、任意、匿名で回答を求めた。

## 結果

### 因子構造の確認と下位尺度の信頼性

失敗観とセルフハンディキャッピングの因子構造を尺度ごとに確認した。

**失敗観尺度**：失敗観尺度について因子分析を行った(重み付けのない最小二乗法、プロマックス回転)。池田・三沢(2012)を踏まえて因子数を4に固定して因子抽出を行い、因子負荷量が.30に満たない項目を除いて因子分析を繰り返した<sup>3</sup>。その結果を表1に示す。下位因子の信頼性の検定のために各因子のCronbachの $\alpha$ 係数を算出したところ、第1因子から順に $\alpha = .83, .78, .74, .73$ と高い値が示されて内的整合性が確認された。

第1因子には“失敗とは、決して起こしてはいけないことだ”や“失敗すると、しばらくは立ち直れない”などが含まれ、失敗をネガティブな事象と見なし、否定的に捉えていることから、「失敗の拒否」因子と命名した。第2因子には“失敗することで、成長が促される”や“失敗とは、気を付けていても起こるものだ”などが含まれ、失敗を学習の機会と捉えていたり、許容する姿勢を保持していることから、「失敗の受け入れ」因子と命名した。第3因子は“失敗は日常茶飯事だ”など失敗は高頻度に不可避的に生じるものだとして捉えていることから、「失敗の高頻度」因子と命名した。第4因子は、“失敗すると、自信を失ってしまう”など自尊感情の低下と関連した項

## 失敗観とセルフハンディキャッピングとの関連

目で構成されていたことから、「自尊感情の低下」因子と命名した。池田・三沢（2012）で見出された因子と類似しており、「失敗の拒否」因子は「失敗回避欲求」因子と、「失敗の受け入れ」因子は「失敗からの学習可能性」因子と、「失敗の高頻度」因子は「失敗の発生可能性」因子と、「自尊感情の低下」因子は「失敗のネガティブ感情価」と多くは同じ項目から因子が構成されていた。

**日本語版セルフハンディキャッピングスケール**：日本語版セルフハンディキャッピングスケールについて因子分析を行った（重み付けのない最小二乗法，プロマックス回転）。沼崎・小口（1990）およびそのオリジナルとなった Jones & Rhodewalt（1982）を踏まえて因子数を2に固定して因子抽出を行い，因子負荷量が.30 に満たない項目を除いて因子分析を繰り返した。その結果を表2に示す。各因子の Cronbach の  $\alpha$  係数を算出したところ，第1因子は  $\alpha = .72$ ，第2因子は  $\alpha = .60$  であった。第2因子の値はやや低いが，ある程度の内的整合性は示されたためセルフハンディキャッピングスケールは2因子構造で解釈することにした。

第1因子には“失敗すると，すぐに状況のせいにしたくなる”や“人に負けたりうまくいかなくなったりしても，余り傷つかないですむように，人とは張り合わない

ことにしている”といった外部に原因帰属をしたり，努力しないといった行動から構成されていたことから，「後ろ向き」因子と命名した。第2因子には“何かうまくできない時，他のことはうまくできると自分を元気づけることがよくある”や“重要な部活動などには，そのために必要な準備や経験が自分にあることを確かめてから参加する”といった積極的に切り替えたり，準備をする行動から構成されていたことから，「前向き」因子と命名した。沼崎・小口（1990）で見出された因子とは違い，因子を構成する項目も異なった。

## 失敗観尺度と日本語版セルフハンディキャッピングスケールとの関連

失敗観尺度と日本語版セルフハンディキャッピングスケールとの関連を検討するため，両尺度の各因子を構成する項目の平均値を下位因子得点とし，その値を用いて Pearson の積率相関係数を算出した（表3）。その結果，「失敗の拒否」因子と「失敗の受け入れ」因子はセルフハンディキャッピングの「後ろ向き」因子とそれぞれ1%水準で有意な正と負の相関が見られ，「自尊感情の低下」因子とセルフハンディキャッピングの「前向き」因子との間に1%水準で有意な負の相関が見られた。すなわち，

表1 失敗観尺度の因子分析結果

項目	1	2	3	4	M	SD
14 失敗とは，決して起こしてはいけないことだ	.805	.005	-.163	-.057	2.27	1.10
10 失敗とは，汚点である	.748	.038	.040	-.062	2.38	0.92
9 失敗とは，決して許されないことだ	.713	.107	-.262	.070	2.24	1.03
24 失敗とは，あってはならないことだ	.639	.023	-.142	.036	2.25	1.08
15 失敗とは，周りから攻められるものである	.611	-.157	.333	.016	3.05	1.00
13 失敗とは，情けないことである	.511	-.265	.057	.074	2.55	1.03
22 失敗すると，しばらくは立ち直れない	.402	-.019	.027	.302	2.95	1.09
19 失敗すると，私は悲しい気持ちになる	.365	.116	.115	.208	2.37	0.87
20 失敗することで，一皮むけることができる	.311	.267	-.089	.223	3.81	0.75
18 失敗することで，成長が促される	.156	.813	-.106	.018	4.00	0.76
16 失敗とは，よくあることだ	.073	.715	.141	-.174	4.12	0.88
17 失敗とは，前に進むための原動力になる	-.122	.623	.083	.015	3.99	0.86
23 失敗を乗り越えることで，成長することができる	-.175	.558	.050	.047	4.12	0.75
11 失敗は，基本に帰ることを思い出させてくれる	-.051	.364	-.041	.038	3.73	0.92
12 失敗とは，気を付けていても起こるものだ	-.125	.335	.265	.099	4.13	0.76
2 失敗は日常茶飯事だ	.005	.014	.910	.081	3.95	0.76
1 失敗とは，頻繁に起こることだ	.077	.118	.754	-.150	4.05	0.73
4 失敗とは，避けられないものである	-.153	-.110	.423	.166	4.20	0.81
8 失敗すると，自信を失ってしまう	-.102	.020	-.152	.824	3.65	0.97
6 失敗したことを，私は後々まで気にしてしまう	-.015	-.176	.099	.638	3.71	0.82
7 失敗すると，自分を否定してしまう	.082	.153	.028	.552	3.44	0.90
3 失敗すると，自己嫌悪に陥ってしまう	.275	.063	.150	.510	3.49	0.94
因子間相関	1	2	3	4		
	2	-.456	—	—		
	3	-.200	.432	—		
	4	.117	.218	.204	—	

注：q20は逆転項目。q5, 21は除外。

表2 日本語版セルフハンディキャッピングスケールの因子分析結果

項目	1	2	M	SD
20 生活のある場面での悩みや不安を、他の場面には持ち込まない	.626	.157	3.39	1.14
8 本を読もうとする時、物音や空想で集中できなくなりやすい	.542	.200	3.14	1.35
1 失敗すると、すぐ状況のせいにしたくなる	.521	.050	2.99	1.10
9 人に負けたりうまくいかなかったりしても、余り傷つかないですむように、人とは張り合わないことにしている	.504	.400	3.04	1.26
5 どんなことでも、いつもベストを尽くす	.476	.232	2.64	0.99
7 試合の前にはとても不安になる	.440	.045	3.47	1.29
21 非常に落ち込んでしまい、簡単なことさえなかなかできなくなってしまふことが時々ある	.409	-.177	4.05	1.26
12 何事もベストでのぞめないのはいやだ	.381	.201	2.80	1.08
18 重要なことがある前には、明瞭に考えたり、適切なことをする能力を妨げるようなものは飲まない	.372	-.076	3.06	1.11
4 人より体調が悪いことが多い	.360	-.119	2.61	1.43
17 スポーツやスポーツテストをする時、運が悪い方だと思う	.341	.129	2.95	1.15
16 何かがうまくできない時、他のことはうまくできると自分を元気づけることがよくある	.140	.650	3.30	1.07
22 気分転換が早くできる方である	-.233	.575	3.64	1.33
6 重要な部活動などには、そのために必要な準備や経験が自分にあることを確かめてから参加する	-.016	.449	3.75	0.90
14 1日か2日の軽い病気なら、時には病気であることを楽しんでしまうこともある	.119	.343	2.87	1.40
3 大事な試合にのぞむ時、十分過ぎるほど準備をしてしまう	-.170	.341	3.37	1.04
因子間相関		-.013		

注: q5, 12, 18, 20は逆転項目。q2, 10, 11, 13, 15, 19は除外。  
q3, 6, 7, 16, 17は沼崎・小口(1990)から表現を一部変更した。

表3 失敗観尺度と日本語版セルフハンディキャッピングスケールの下位因子間の相関関係

	失敗の拒否	失敗の受け入れ	失敗の高頻度	自尊感情の低下
	2.65 (0.53)	4.01 (0.57)	4.06 (0.63)	3.57 (0.68)
後ろ向き 3.10 (0.62)	.39 ***	-.32 **	-.06	.26 *
前向き 3.39 (0.73)	.06	-.13	-.20	-.33 **

注: \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$ , 無印は *n.s.*  
因子名に隣接する数値は、平均値(標準偏差)を示している。

「後ろ向き」な行動の背後には失敗を拒否し、学習の機会とは捉えずに失敗を受け入れない価値観があることが示唆されることに対して、「前向き」な行動の背後には失敗は自尊感情の低下を招かないと見なす認知体系があることが示唆された。

## 考察

### 因子構造の確認と下位尺度の信頼性

大学生のフィールドホッケー部員を対象に部活動に場面を限定して失敗観とセルフハンディキャッピング傾向に回答を求めた。失敗観では、「失敗の拒否」、「失敗の受け入れ」、「失敗の高頻度」、「自尊感情の低下」の4因子が示された。セルフハンディキャッピングでは、「後ろ向き」と「前向き」の2因子が示され、外部に原因帰属をしたり、努力をしないといった後ろ向きな行動をするこ

とと、積極的に切り替えたり、準備をする前向きな行動をすることは別物であることが示唆された。

失敗観尺度では池田・三沢(2012)に似た因子が抽出され、セルフハンディキャッピングスケールでは沼崎・小口(1999)とは異なる因子が抽出された。これについてはいずれも尺度作成時には大学生を対象に2度の調査を行って因子構造が確認されているものの、失敗観尺度は因子負荷量.40以下の項目を切り捨ててCronbachの $\alpha$ 係数は.88・76と内的整合性が高い確固とした因子を見出すことを重視していたことに対し(池田・三沢, 2012), 日本語版セルフハンディキャッピングスケールでは因子負荷量.30を基準に用い、Cronbachの $\alpha$ 係数は.61・63であった(沼崎・小口, 1990)。沼崎・小口(1990)はオリジナル版セルフハンディキャッピングスケール(Jones & Rhodewalt, 1982)を重視して因子にファジ

## 失敗観とセルフハンディキャッピングとの関連

一な部分を残したと言える。オリジナル版に関しても、Jones & Rhodewalt (1982) は「主張的」「遂行的」という 2 因子を見出しているが同尺度を用いた研究では各因子を構成する項目は安定せず (e.g., Martin & Brawley, 1999), 同尺度を翻訳した沼崎・小口 (1990) は、「主張的」「遂行的」ではなく、「やらない」「やれない」という 2 因子を見出している。こうした背景を踏まえると、2 因子構造は比較的強固に確認されるもののその因子は調査対象や状況を加味して捉えることが適した尺度であると考えられ、大学生のフィールドホッケー部員の部活動におけるセルフハンディキャッピングでは「後ろ向き」「前向き」という新しい 2 因子が見出されたかと捉えられる。

### 失敗観尺度と日本語版セルフハンディキャッピングスケールとの関連

「失敗の拒否」と「失敗の受け入れ」は「後ろ向き」な行動とそれぞれ正・負の相関が見られた。失敗を否定し、受け入れない価値観が、後ろ向きな行動に繋がると言える。一方、「自尊感情の低下」は「前向き」と負の相関が見られた。そのため、失敗は自尊感情の低下を招かないと見なす認知体系が前向きな行動を支えていると言える。Rhodewalt & Tragakis (2002) はセルフハンディキャッピング過程モデルで、セルフハンディキャッピングの直接的誘因 (Proximal motives) にパフォーマンスに対する能力と予期されるセルフイメージへの脅威を挙げているが、予期されるセルフイメージへの脅威と近い概念にあたる「自尊感情の低下」は「後ろ向き」な行動と正の相関が見られたものの、それよりも「前向き」な行動とより高度で強い負の相関を示している点は興味深い。この失敗は自尊感情の低下を招かないと見なす認知体系を有しているとして「前向き」な行動に繋がるという結果は、注意の焦点化によって説明できる可能性がある。

山口(1988)は、失敗経験後は対内的注意が増大して相対的に周囲の状況への注意が希薄になり、援助事態に気づかないことによる援助行動抑制効果が作用することを示したが、こうした注意の焦点化が個人内でも生じたと考えられる。すなわち、「自尊感情の低下」という価値観を有していると失敗が招く自身のネガティブな感情価に注意が向き、着眼点を移して「前向き」な行動をとることがしにくいと考えることができる。ネガティブな気分や情報に固着している状態ではそこから自発的に外的対象へ注意を転換することは困難であり、これは健常者

(nonclinical) の特性的な傾向においても同様であることが指摘されている (e.g., 石川・越川, 2015)。

### 本調査の限界

本調査は、フィールドホッケー部員を対象に部活動場面での失敗観とセルフハンディキャッピングの因子構造を確認し、失敗観とセルフハンディキャッピングとの関連を明らかにすることを目的にした。調査結果から、後ろ向きな行動をすることと前向きな行動をすることは表裏の関係にあるのではなく別の因子であり、それぞれには異なる失敗観が関与していることが示された。

大学生のフィールドホッケー部員のみを対象に部活動に場面を絞って大会シーズンに回答されたデータで検討することができたが、参加者は 83 名と因子分析を行うには人数が少なかった点は問題であった。また、今回に見出された因子構造が安定的に見出されるものであるか、一般化できるかについては本調査の参加者に追跡調査を行うあるいは別の大学生フィールドホッケー部員を対象に行うなどして検討する必要がある。また、「自尊感情の低下」と「前向き」な行動との間に関連が見られた理由に注意の関与が考えられたが、これについては推察に過ぎない。今後、実証的に検討していくことでセルフハンディキャッピングが生じる過程をさらに明らかにしていくことができるだろう。

### 謝辞

本調査は中山諒氏の平成 27 (2015) 年度卒業論文「スポーツにおけるセルフハンディキャップと失敗観との関係」を再分析してまとめたものである。調査にご協力頂いた皆さまにはこの場をかりて改めて御礼申し上げます。

### 注

注 1. ここでは自身の体験に基づく学習のみに焦点を当てたが、経験者の自叙伝を読む、先輩から話を聞くといった先人の失敗談から学ぶということはスポーツに限らず様々な領域で日常的に行われている。

注 2. 沼崎・小口 (1990) は 23 項目を用いていたが、そのうち 1 項目は 2 因子に同程度の負荷量を示していたため、その項目を除いて本調査では 22 項目を用いた。

注 3. 失敗観尺度に関しては固有値が 1 以上や寄与率が 60%以上を基準に因子数を採用すると 7 因子または 6 因子構造と因子数が多くなった。またセルフハンディキャッピングスケールでも、固有値が 1 以上や寄与率

が60%以上を基準に因子数を採用すると9因子または7因子構造と因子数が多くなった。そのため、最終的に確定的因子分析を採用し、解釈することにした。

## 引用文献

- Arkin, R., M., & Baumgardner, A. H. (1985). Self-handicapping. In J. H. Harvey & G. Weary (Eds.), *Attribution: Basic issues and applications*. New York: Academic Press, pp.169-202.
- 安藤清志 (1990). 「自己の姿の表出」の段階 中村陽吉 (編) 「自己過程」の社会心理学 東京大学出版会, 143-198.
- Feick, D. L., & Rhodewalt, F. (1997). The double-edged sword of self-handicapping: Discounting, augmentation, and the protection and enhancement of self-esteem. *Motivation and Emotion*, 21, 147-163.
- 池田 浩・三沢 良 (2012). 失敗に対する価値観の構造. 教育心理学研究, 60, 367-379.
- 稲地裕昭・千駄忠至 (1992). 中学生の運動部活動における退部に関する研究 : 退部因子の抽出と退部予測尺度の作成 体育学研究 37(1), 55-68.
- 石川遥至・越川房子 (2015). 切り絵作業が高反すう者の抑うつ・不安気分および注意状態に及ぼす影響. ストレス科学研究, 30, 125-130.
- Jones, E. E., & Rhodewalt, F. (1982). Self-handicapping Scale. *Unpublished manuscript*, Department of Psychology, Princeton University.
- Leary, M. R., & Shepperd, J. A. (1986). Behavioral self-handicaps versus self-reported handicaps: A conceptual note. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 1265-1268.
- Martin, A. K., & Brawley, R. L. (1999). Is the self-handicapping scale reliable in non-academic achievement domains? *Personality and Individual Differences*, 27, 901-911.
- McGowan, R. W., McGowan, S. J., & Omifade, A. (1997). Cultural effects: Affects following ruminations on success and failure in sports. *Perceptual and Motor Skills*, 85, 1339-1343.
- 沼崎 誠・小口孝司 (1990). 大学生のセルフハンディキャッピングの二次元. 社会心理学研究, 5(1), 42-49.
- Rhodewalt, F., & Tragakis, W. M. (2002). Self-handicapping and the social self: The costs and rewards of interpersonal self-construction. In J. P. Forgas & K. D. Williams (Eds.), *The social self: Cognitive, interpersonal, and intergroup perspectives*. pp.121-143. Philadelphia: Psychology Press.
- Rhodewalt, F., Saltzman, A. T., & Wittmer, J. (1984). Self-handicapping among competitive athletes: The role of practice in self-esteem protection. *Basic and Applied Social Psychology*, 5, 197-210.
- Sagar, S. S., & Stoeber, J. (2009). Perfectionism, fear of failure, and affective responses to success and failure: The central role of fear of experiencing shame and embarrassment. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 31(5), 602-627.
- 笹川スポーツ財団 (2015). 中央競技団体現況調査 2014.
- 山口裕幸 (1988). 成功・失敗経験による注意の方向性の違いが援助行動生起に及ぼす効果. 実験社会心理学研究, 27(2), 113-120.

## Beliefs about Failure and Self-Handicapping: in Field Hockey

Yuko Adachi, Ryo Nakayama

### Abstract

This study proposed to clarify the factor structures of beliefs about failure and self-handicapping. Accordingly, we examined the associations between beliefs about failure factors and self-handicapping factors. University students belonging to the field hockey club ( $n = 83$ ) were asked to answer the Beliefs about Failure Scale (Ikeda & Misawa, 2012) and the Japanese version of the Self-Handicapping Scale (Numazaki & Oguchi, 1990). The Beliefs about Failure Scale yielded four factors: “refusal of failure,” “acceptance of failure,” “high frequency of failure,” and “lowering of self-esteem.” These factors were similar to those found by Ikeda and Misawa (2012). The Self-Handicapping Scale yielded two factors: “downbeat” and “upbeat.” It was suggested that “downbeat” behaviors, such as making external attributions or making no intentional efforts, and “upbeat” behaviors, such as changing factors in a positive way or preparing, were two different concepts. Moreover, it was suggested that there was a positive relationship between “refusal failure” and “downbeat” behaviors, a negative relationship between “acceptance of failure” and “downbeat” behaviors, and a negative relationship between “lowering of self-esteem” and “upbeat” behaviors.

Keywords: Beliefs about failure, Self-handicapping, Field hockey